

洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内

洛友会

〒606-8202

京都市左京区田中大堰49

075-701-3164

迎春

二〇〇〇年一月一日

洛友会役員

幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	北海道支部長	東北支部長	北陸支部長	九州支部長	四国支部長	中国支部長	中部支部長	関西支部長	東京支部長	副会長	副会長	副会長	会長
松本	荒木	藤田	神戸	木村	池内	大島	中園	大藤	近藤	池内	大野	宮本	廣田	上田	池上	大嶋	近藤
	光茂	俊根	磐則	義寛	恭一	繁治	耕三	浩一	彰一	豊一	亮夫	文治	幸夫	文治			
博彦	夫彦	夫彦	夫彦	夫彦	夫彦	夫彦	夫彦	夫彦	夫彦	夫彦	夫彦	夫彦	夫彦	夫彦	夫彦	夫彦	夫彦

西暦2000年の新年を迎えて

電気系教室の大変革について想う

洛友会会長 近藤 文治



歴史の中で特筆されるべき大きな出来事がありました。

ご承知のように、数年来京都大学では学部中心の大学から大学院主体の大学に編成替えが進み、昨年で一応の完成を見ました。従来、電気系分野の電気工学科、電子工学科、電気工学第2学科の3学科は、電気系学科と称し、あたかも1学科のようにして運営されてきました。また、電気工学分野に隣接する研究所や研究施設の関係教官は、教育に関する限り電気系学科に所属して教育に当たってまいりました。一方、大学院は、各学科の上に学科と同名の3専攻が設置され、学部同様系として運営されてきました。

大学が大学院主体に切り替わったとき、学部3学科は電気電子工学科1学科に統合されましたが、学生定員も教官（研究所や研究施設の教官を含め）も変化なく、学部教育に関する限り殆ど変化はありませんでした。ただ教官の身分が大学院に移り学部は併任となりました。一方、大学院は編成替え

当初、電気工学専攻、電子物性工学専攻、電子通信工学専攻と名称だけの変更されましたが、その後、電気系に属していたプラズマ工学研究施設及び原子エネルギー研究所の関係部門の教官は、工学研究科を抜けて、新設されたエネルギー科学研究科に移籍され、さらに昨年4月に情報学研究科が全学的な研究科として創設されるや、電気系の電子通信工学専攻は組織を挙げて移管されました。それに伴い電気系大学院は電気工学専攻及び電子物性工学専攻の2専攻となりました。新設の2研究科は学部教育組織を持たない独立大学院で、全国の大学から学生を募集しますが、その主力は、それらの教官が学部教育にタッチしている学部・学科の卒業生であることは言うまでもありません。

過去2年間の電気電子工学科の卒業生の大学院進学状況は表の通りで、学部卒業生の70〜80%が大学院に進学し、その内約半数が電気系大学院に留まりますが、残り他研究科に進学し、情報学研究科には30〜40%が進学しています。以上述べた電気系教室の変貌に対応して、洛友会会則第5条会員の条文の一部を変更し、平成9年5月の総会では「電気電子工学科卒業生」の字句を挿入し、さらに平成10年5月の総会では「エネルギー科学研究科・情報学研究科の関連研究室の修士課程及び博士課

西暦2000年という千年に一度の記念すべき節目の新年を迎え、先ずは新春慶祝のご挨拶を申し上げ、会員各位並びにご家族の皆様のご多幸とご健勝を心からお祈り申し上げます。
さて、数え年では20世紀から21世紀に切り替わる世紀の瞬間を、コンピュータの2000年問題で異常な雰囲気の中で迎えました。が、これを克服して、この一年が有意義な思い出の年になることを祈らずにはおれません。
一昨年、母校京都大学工学部電気工学科が創立百周年を迎え、盛んな記念行事が挙行されましたが、昨年一年間にも電気工学科の

種別	平成10年度	平成9年度
学部卒業生(名)	128 (121%)	142 (129%)
大学院進学者	106 (100%)	110 (100%)
電気系大学院	54 (54%)	52 (47%)
情報学研究科	34 (32%)	45 (41%)
エネルギー科学研究科	9 (8%)	12 (11%)
他大学大学院	9 (8%)	1 (1%)

「程終了生」の字句を挿入して、洛友会の受入態勢の整備を図りました。これらの変更は、基本的には、学部組織の電気電子工学科の卒業生を中心に洛友会を構成し、これに、電気電子工学科教官が担当する大学院各研究室に他大学(あるいは他学部)から進学してくる大学院卒業生を加えて会員とする従来の姿勢を貫いています。ただ従来と異なるのは、エネルギー科学研究科あるいは情報学研究科には洛友会とは別にそれぞれ固有の同窓会組織ができる可能性があり、その時洛友会としては、2足のわらじを履きたくなる魅力あ

る洛友会であらねばなりません。今後の洛友会の活動が益々盛んになることを祈って止みません。さらに昨年年末近くになって、今一つの大きな変革が母校電気系教室に起きることがほぼ確定的になりました。それは電気系教室の所属する工学研究科が、昨年創設された情報学研究科と共に、大学創設以来存続していた吉田キャンパスを離れて、京都市西京区御陵(五条通り―国道9号線沿いに西端部)に桂キャンパスを建設し移転することが学内的には決定されたことです。移転は大学院だけで、学部教育は従来通り吉田キャンパスで行われます。現段階では大綱が決定されただけで、細部は文部省との今後の折衝に掛かっています。

明治31年電気工学科創設以来、100年の永きにわたって吉田キャンパス本部構内に存続したのでありますが、戦後における工学部の拡張は他学部比べて突出し、教員数及び学生数は何れも全京大の1/3を占めるようになりました。その上他学部の拡張も加わり、本部構内は超過密状態となりました。さらに最近の大学院の充実に伴い、本部構内の過密度は限界を超え、学問の府とは程遠い雰囲気になりました。

京都大学では昭和60年代当初から、吉田キャンパス、宇治キャンパス(研究所や各種研究施設が集

合しているキャンパス)の他に、将来の大学の拡張に備えて、第3のキャンパス用地取得が検討されてきました。候補地は2転、3転の末漸く上述の桂キャンパスに決定した次第です。

情報学研究科の新設と云い、工学研究科の桂キャンパス移転と云い、教室の歴史始まって以来の大きな変革であります。学問の進展に対応する措置としては当然のことであり、教室の発展のためには喜ばしい限りであります。卒業生の皆様には思い出深い吉田キャンパスを大学院だけにしても母校が離れることに一抹の寂しさを感じられることと存じます。

最後に母校が21世紀に向かって、20世紀100年の輝かしい実績を踏まえ益々発展されることを、心から願って新年のご挨拶といたします。

洛友会京大電気百周年記念事業のその後の経緯について

一 昨年9月には記念行事を開催し、記念誌を刊行致しました。その後は、この事業により電気関係教室と産業界との交流を深める活動支援や大学院学生の奨学支援等を内容とする永続事業とするため、継続して企業からのご寄付や賛助会員ご加入等をお願いし、財団を設立することを目標としてまいりました。そのためには、百周年記念事業実行委員会という洛友会の一組織としてよりも、独立した協会とした方が所期の目的が達成しやすいのではないかとのご意見もあり、協会に移行する方向での検討をしてまいりました。平成11年6月の洛友会総会でもそのような経過報告を致しております。

しかし、継続した景気の低迷と、日本の産業の慢性的な不況を考慮しますと、この上企業からの多額のご寄付を期待した財団設立は大変困難と判断されます。そのことを踏まえて、今後の事業の進め方について昨年9月記念事業実行委員会幹事会を開催し、あらま以下のような結論を得ましたのでご報告いたします。この内容は記念事業実行委員の皆様にも議事録のかたちでお送りし、ご報告しております。

一、協会移行の見合わせ

現在のように同窓会の延長のような形では財団法人化が認められないこともあり、また企業からの賛助が得難いという理由もあつて、昨年4月、この事業を独立した協会に移行する案が考えられ実行委員の方々にご意見を求めた経緯がある。しかしながら、現状の社会の経済的不況を考慮すると、財団法人化の申請をするための基金3億円を集めることはきわめて困難である。そこで、法人化を断念するとしても、少なくとも所期

迎春

二〇〇〇年一月一日

京都大学

電気関係教室

教官一同

フジテック株式会社

取締役社長 大谷 謙治

ヤール株式会社

松下電器産業 株式会社

日新電機株式会社

代表取締役社長 安井 貞三

の目的の永続事業が少しでも長く続けられるような方策を取る必要がある。協会への移行は、この事業への企業からの賛助が得やすくなるという期待は持てるがその保証はない。加えて、協会として組織を今以上に確固たるものとする、その組織維持のための支出が増え、また、協会としたときの事務局をどうするかなどいくつかの問題があることがわかった。

当初に計画された事業は、(1)京都大学電気関係教室と産業界との交流を深めることであり、そのために電気関係教室の情報誌「Cue」の発行を継続する、また電気関係教室構成員と企業の方々も参加した講演会(これまでの懇話会)を支援する。

(2)大学の研究のアクティビティを高めるために大学院(特に博士課程)学生への奨学、の2つであった。これまでに洛友会会員、企業から頂いた醸金の残額をもとにして、それが年々減少して行くことを容認すれば、上記の(1)の事業のみであれば10年以上の継続は可能である。したがって前記の協会への移行案は当面見合わせ、これまでの組織・体制「洛友会京都大学電気百周年記念事業」実行委員会および幹事会でこの事業を引き続き維持して行くこととした。

なお幹事会の構成は近藤文治実行委員会会長(洛友会会長)、電気関係教室からは、松波弘之、藤

田茂夫、奥村浩士、島崎眞昭、吉田進、佐藤亨各教授、学外から田丸啓吉(岡山理科大)、木村磐根(大阪工大)各名誉教授である。なお教室側の幹事の代表は松波教授が務めることとなった。

二. Cueの発行

Cueの編集は教室の編集委員会(委員長・奥村浩士、委員・佐藤亨、小野寺秀俊教授、野田進、萩原朋道、川上養一助教授)で行われ、これまで同様な2回発行する。配布先はまずは賛助会員であるが、現在は会員数が少ないので、洛友会会員で記念事業に寄付を頂いた方にお送りしている。今後は、配布先の見直しと、産業界との結びつきを強めるのに貢献する配布先を新たに付加することとなった。これまでの1号当たりの発行部数は1800部であるが、次号から、上記のことも考えて2000部とすることとなった。

洛友会会員の皆様には、以上のような経緯をご理解の上、この記念事業が少しでも長く続くために、各企業からは賛助会員の形でご協力を頂き、教室と産業界とのつながりが更に密になるようご支援を宜しくお願い致します。

洛友会京大電気百周年記念
実行委員会
幹事会世話代表
木村 磐根(大阪工大)

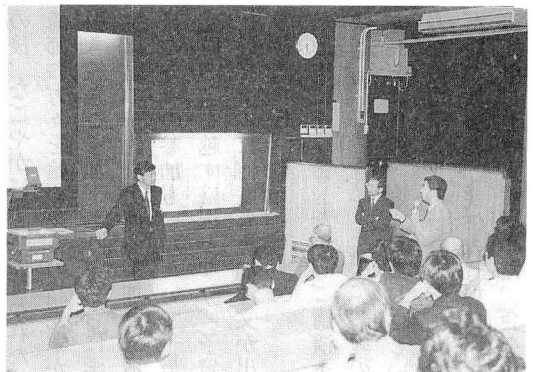
教室だより

電気系教室懇話会

恒例の電気系教室懇話会講演会は、10月1日(金)午後3時より電気系総合館中講義教室で開催された。講師には、加藤進名誉教授(昭和27年卒)、田中千秋日本電池取締役社長(昭和33年卒)、成松洋日本ヒューレット・パッカー取締役事業部長(昭和46年卒)の御三方をお迎えした。

まず、島崎眞昭教授(電気工学専攻長)の司会のもとに、松重和美教授(電子物性工学専攻長)から挨拶があった。会の趣旨とお礼を述べると共に、電気系教室が昨年100周年を迎え第2世紀に入った折りから、京大第3キャンパスへの移転問題、大学そのものの独立行政法人(AGC)化問題などが持ち上がっており、ここ数年が大学にとって重大な年になる、との大学の近況が紹介された。続いて、松重教授司会のもとで講演いただいた。

最初に、加藤先生が「南北学術協力への試み」と題して、超高層研究時代から退官後の国際高等研究所フェローまでの、ご自身の長い海外学術交流(特にインドネシアと)の活動経験と、その重要性について講演された。当初、先



生の海外交流は、日本の開国以来の歴史と同様、ヨーロッパ、アメリカとの東西交流が中心であったこと、しかし、大気圏の研究をやっている、大気のエネルギ、物質は南方海洋の温度上昇により南からやってくるということが分り、南方のデータが必要となるのにそれがなかったこと、そのため、インドネシアで観測施設の適地探しを始め、ボルネオ島の緯度0度地点に、世界で初めてレーダー観測施設を作り上げられたこと、などを実際の観測データを交えて紹介された。このような研究は先進国だけが勝手にやっても仕方がないので、現地の研究者が自分の問題として捉えてくれるよう一緒に研究し、専門家養成、人材教育をも志され、以来、現地の大学の客員教授も勤められ、若い学生とも交

迎春

二〇〇〇年一月一日

株式会社
S C C
代表取締役社長 松尾 泰

宇宙技術開発 株式会社
代表取締役社長 松尾 泰

電子開発学園
理事長 松尾 泰

高周波熱錬 株式会社
代表取締役社長 大谷 茂久

muRata 株式会社
取締役社長 村田 泰隆
村田製作所

わって南北学術交流に努力された経験を話していただいた。特に、印象に残ったのは、先生が退官後、インドネシア語の勉強を始められ、発音の難しさから会話ではいろいろおかしな失敗談もあったが、読むことはできるようになった、とのことである。いつまでも「学ぶ」ということが大切なことをお教えいただいたものと思う。

次に、田中社長に「最近の電池産業の動向」と題して、電池の市場と開発動向を、経営学も含めてご講演いただいた。まず、1年間の電池使用量が延べで65億個(8千億円の市場)、一人当たり50個とお聞きして驚き、電池の分類を教えていただき、その多様性に認識を新たにした。時代と共に電池

の総消費量は一貫して増えているが、電池の種類の内訳は変化しており、最近ではリチウムイオン電池が急増し、使用目的としては携帯用機器の使用量が増えていることを、グラフ化した豊富なデータを引用して紹介された。さらに、電池の開発は重量エネルギー密度(より軽く)、体積エネルギー密度(より小さく)の向上を目指して進められてきた結果、ニッケルカドミウム、ニッケル水素、リチウムイオン電池として結実したが、さらに高い目標としてモジュール電池が研究されていることを話された。最近では1mm、1gを争っている感じで、メーカーとしては、ここまでやらんといかんのかと思う、と述べられたのが印象的であ

山田 公教授・上田 皖亮教授退官記念最終講義のご案内

山田 公教授ならびに上田 皖亮教授におかれましては、来る平成12年3月31日付けで、停年退官されることになりました。左記の通り両先生の退官最終記念講義を開催致しますので、ご案内申し上げます。

日時 平成12年3月3日(金)
場所 工学部電気総合館大講義室
第一部 午後1時30分～午後3時
山田 公教授

第二部 午後3時20分～午後4時50分
上田 皖亮教授
「イオン工学のあゆみ」
「カオス研究の経緯と将来展望」

連絡先 京都大学工学部電気電子工学科
高岡義寛 TEL 075・753・5952
Takaoka@kueekyoto-u.ac.jp
引原隆士 TEL 075・753・5369
hkihara@kueekyoto-u.ac.jp

記念事業の詳細は、4月号でご案内いたします。

った。さらに、電気自動車の電源としての電池の動向についても紹介され、ガソリンと電気を共用するハイブリッド車の発展の可能性を示唆された。一般に、電池は材料屋の仕事で、電気屋の仕事ではないと言われていると紹介されたように、身近にありながら、案外、我々がその実態を知らない電池にまつわる広いお話をお聞きし、目を開かれた思いであった。また「最新実用二次電池」(日刊工業新聞社)という立派な本をお配りいただいたのも、ありがたいことであった。

最後に、成松部長から「最近の企業経営動向についてーシリコンバレーのある電子機器企業の事例ー」と題して、ご自身の体験も交えて、世界の大きな流れの中での

企業のあり方についてご講演いただいた。1938年、2人の若者がカリフォルニアのガレージ(現存)で始めた会社(現CR発振器、ウイーンブリッジ発振器から出発し、サンプリング・オシロスコープ、最も明るいLEDの開発など、次々に新製品を生みだし、それに伴って売り上げを伸ばし、遂に5万million\$の企業に成長し、最近2つの独立会社に発展的分離するまでの歴史を紹介された。その歴史の中で、1957年「会社の目的」を制定して社員に徹底し、大企業に発展したことによる弊害を避けてきたことを説明された。大

恐慌の経験もあって、自分たちの得た利益を次の成長に投資し、基本的に借金はしないというマネージメントが貫かれ、生涯営業利益額が開発投資額の6倍以上という明確な目標が設定されるなど、工学部の人間の疎い分野の興味深いお話もあった。特に、「どんな人でも立派な仕事、創造的な仕事をしたいと望んでおり、適切な環境が与えられれば必ず成功するものだ」というポリシーと行動を社風とするというお話に、アメリカの良き一面を見る思いであった。

講演会の参加者は学外諸先輩、教室内あわせて約80名で、活発な質疑もあって、非常に充実した講演会であったと思う。

6時より会場を吉田(旧教養)生協食堂2階に移し、懇親会がもたれた。出席者最年長の小川徹名誉教授のスピーチと乾杯のご発声の後、なごやかに懇親が行われた。講師の方々を始め多くの諸先輩が引き続きご参加下さり、さらに学生諸君の予約を上回る参加と、職員の方々の参加もいたっていて、最盛時130名を越す盛況となり、予定数のビールに何度も追加注文が出る有様であった。

最後になりましたが、ご講演を快くお引き受け下さった講師の方々をはじめ、遠くからお越しいただいた卒業生の皆様、参加いただいた教職員、学生の皆様に厚くお礼申し上げます。また、会をサ

迎 春

二〇〇〇年一月一日

 **日本電池**
取締役社長 田中 千秋

 **電気評論社**

財団法人 **近畿地方発明センター**
理事長 近藤 文治

財団法人 **応用科学研究所**

(株) **田中プリント**

ポートしていただいた洛友会関係、教室教職員の皆様には厚くお礼申し上げます。

洛友会会員の皆様には、今後とも教室懇話会の場にご参加いただき、教職員、学生と親しく交わっていただきますよう、心よりお願い申し上げます。

倉光 正巳（昭38年卒）記

会員寄稿

私のアメリカ滞在記

池本克行（昭62年卒）

昨年5ヶ月間ではありましたが、仕事でアメリカに滞在する機会があり、初めてのアメリカ滞在中の私の見聞したことの中からトピック的な出来事を少しためてみたいと思います。ただし、英語も片言の私が一人でアメリカを歩き来し見聞したことなので、いくらか誤解・間違いもあるのではないかと思いますので、話5分程度に聞いて下さい。

・アメリカの地下鉄にて

ワシントンDCを拠点にしてみましたから、一番ワシントンDCにいた期間が長かったのですが、いつも朝晩地下鉄で、お世話になっていた海外電力調査会の事務所まで通っていました。電車は混んでいる時でも日本のように体がふ

れあうというような事はなく、乗客の間を縫って電車から乗降することが出来ました。

ある日の夕方、事務所からホームステイ先へ帰宅する際、どうも電車にトラブルがあったらしく、地下鉄の駅のホームには人があふれていました。電車が来るまで20分程度待ち、ようやく来た電車に日本人の感覚で人を掻き分けて乗りこもうとしたところ、ようやく来た電車もかなり混んでおり（日本人の私の感覚では少し混んでいてる程度）、数人が乗り込んだところで、中から「いっぱいだからもう乗るな」と男の人の声がかかって、乗車口のところで乗り込もうとしていた人が立ち止まり、それ以上は乗ることが出来ませんでした。

東京出張などの折り、朝のラッシュ時には乗客が無理やり電車に乗り込む姿を目にしている私には非常に新鮮な出来事でした。

・テキサス州での電車

テキサス州に2日滞在した際のことですが、ダラス市郊外のモーターテルに宿泊しました。私が滞在したモーターテルのまわりにはモーターテルが点在し、民家はほとんど無いようなところで、モーターテルのそばを空港とダラス市を結ぶ高速道路が走っており、それと並行して鉄道が走っていました。

電車は1時間に一本程度走っていましたが、それが何故分かったかという、電車が通過する際に

は、電車がけたたましく警笛を鳴らしてモーターテルの付近を通過していったからなのですが、何故けたたましく警笛を鳴らしていたかという、ちょうどモーターテルの前の辺りに鉄道を横切る道路があり、そこには日本の踏み切りのような警報機のような物はなく、ただ道が鉄道と交差しているだけのもので、電車が車と衝突しないように、そこを通過する際にはけたたましく警笛を鳴らして通過していました。

電車は、その踏み切りのかなり手前から、かなり大きな音で警笛を鳴らしており（そこを通過する車に、その存在を知らせるためだから大きいのはあたりまえか）、私が滞在した部屋からはその音がよく聞こえました。

電車は、朝の5時過ぎから夜の11時ころまで走っており、まだ眠りの中にあつた私は、2日も朝の5時過ぎから、けたたましい警笛にたたくき起こされ、滞在の疲れが更に倍増してしまいました。

他の宿泊客はどうしていたのか分かりませんが、モーターテルの職員に文句を言ってもどうしようもないことであり、アメリカの鉄道事情を認識させられた2日間でした。

・アメリカのフィットネスジム

今回のアメリカ滞在では、事務所のあるワシントンにいつもいっており、宿泊はワシントンのす

ぐ隣のバージニア州アーリントン市でホームステイしていました。私は日本にいたころから、週に1回程度フィットネスセンターにいったってトレニングをしていましたから、アメリカでもそうした場所を探していたところ、ホームステイ先のすぐ近くに、ちょうどいいジム（日本にもあるゴールドジム）があり話を聞きに出かけました。

出かけたジムはトレニングマシンとダンベル等のウエイトが非常に豊富で、日本では見たことが無いような100ポンド（約45kg）のダンベル等も置いてありました。

ジムの人は、いろいろマシンのことを説明しながら、「5時から9時まで使用できます。」と説明してくれたのですが、その5時という言葉を私は午後の5時と理解し、「たったの4時間しかやっていないの」と質問すると、5時というのは朝の5時だと答えてくれました。私はちょうどそのころにワシントンの語学学校に通っており、その教師に「朝の5時から人が来てトレニングをするものか？」と聞いてみたところ、「需要があるから朝の5時からジムを開けているのだ」と説明してくれました。

料金も日本に比べると安く、私が契約したのは月46ドル（毎回の使用料は無く、制限も無し）でしたが、年会費を100ドルほど払えば、

月の使用料は更に安くなる設定になっており、年会費も入れた平均の使用料は25ドル程度となりました。

それから多いときは週に3回程そのジムに通いましたが、日本のフィットネスセンターで見ると年齢の高い方というのは数が少なく、いたとしても本格的にウエイトトレニングを行なっており、それ以外はほとんどが筋骨隆々のマッチョマン・マッチョウマンであり、私が扱えないような非常に重いウエイトでトレニングのセットをこなしている姿を良く見かけました。小さな子供専用の部屋があり、子供はそこで遊ばせてトレニングをしている人も多く見かけました。

日本でのトレニングを行なう際には、重いウエイトになればそのスタッフの方がついてくれることが良くあるのですが、そのジムでは、近くでトレニングをしている人にサポートをお願いすれば良く、互いにサポートをしながらトレニングを行なっているというふうでした。私もベンチプレスを行なう際には、近くでトレニングをしている人にサポートをお願いしましたが、その人がサポートしながら「カモン！ カモン！」とか「プッシュ！ プッシュ！」と声を掛けてくれるため、非常に張り合いのあるトレニングとなるがありました。

・アメリカのタクシー
移動の際には、頻繁にタクシーを利用しましたが、このタクシーでもいろいろな出来事がありました。

最初にサンフランシスコでタクシーに乗った際には、運転手がネイティブのアメリカ人ではなく、英語が片言で、タクシーを走らせながら「ブリック、ブリック」というのですが、何のことか分からず困っていると、橋を指差してまた「ブリック」と言います。私はようやく意味が分かり「ブリッジ」と聞き直すと「イエス」という答え、どうやら橋を通行する際には通行料金がかかるということが言いたかったようでした。

また、その同じタクシーでの出来事ですが、車が道路の小さなこぼこを通過する際に車に何かあったっている音がしていました。何が車にあたっての音かとかを聞き返すと、車の右のサイドミラーがテープで止められただけで垂れ下がっており、それが車の振動に合わせて揺れるたびに車にあたって音がしていました。整備不良とはならないのだろうか等と考えながらそのタクシーに乗っていました。

また、ニューヨークでタクシーに乗った際には、タクシーの後部座席はプラスチックのボードで運転席と隔てられており、料金をやり取りする小さな窓が空いていま

した。確かに誰でも銃を持っているアメリカならではの光景でしょうか。それからもう一つ、デトロイトにいった際のことですが、空港から、予約していたモーターに電話して、どういう方法で空港から行けばよいかを聞くと、「タクシーで来れば15ドル程度だ」と答えてくれて、15ドル程度ならシャトルバスと料金的にかわらないかと思

い、空港からタクシーを拾いモーターまで向かいました。タクシーの運転手には住所を告げたのですが、タクシーの運転手にもその場所がよく分からないらしく、その辺りまでいってから、同じ通りを行ったり来たりし、挙句の果てには別のモーターに入

って、この辺りにこういう名前のモーターはないかと聞くありさま。ようやくそのモーターに辿り着きましたが、辿り着いたときには料金は25ドルを越えており、チップと合わせて30ドルを支払い

ました。モーターでチェックインの際に「30ドル支払った」というと、モーターのスタッフから「メーターは良く確かめたのか」と聞かれましたが、ここが分からず同じ道を何度も行ったり来たりしたこと

を説明すると、それはしようがないかというお話をしていました。

・映画
アメリカ滞在中に数回映画館に足を伸ばしました。アメリカの映画館はたいいしょッピングモデルの中にあるのですが、料金設定が非常に安く、正規料金が7〜8ドル、昼間に行けば、3〜4ドルで映画を見ることが出来ます。

アメリカ人は映画館に入るとジュースやらポップコーンやらを買い込んで、それを抱えて映画を見

ていました。私も一度ジュースを買ったのですが、Sサイズをくれ

というとき、Sは置いてないとの答え、仕方なくMサイズを注文したのですが、これがまた日本で言う

このごろです。

電気・磁気の玄妙な特性

中島 将光 (昭35年卒)

電気系教室において教育・研究に携わって知り得た電磁現象の驚べき特性の一端を紹介し、教室に長らくお世話になったお礼の言葉に代えさせていただきますと思います。

昨年度、京都大学の電気教室は創立百周年を迎えました。このように電気そのものについては古くからよく知られており、いままら電気

の専門家にお話する事はない筈です。電気に関する文献や図書も汗牛充棟ただならぬものがあります。電磁気学は微の生えた学問と受け止められており、電気を専攻する学生も電磁気学に殆ど興味を示さないような状況です。

しかしながら、世の中を広く見渡すと、電気を利用する機器は増加する一方です。一昔前まで時計やカメラは電気とは関係なかった訳ですが、電子工学の発展に伴って、それらの性能が格段によくな

った事は述べるまでもありません。文章を書くにも、ペンや鉛筆ではなく今やワープロが使われ、インターネットなどの情報機器も加速度的に進展しています。このように電

気を使う機器はあらゆる分野に浸透しています。では、何故このように電気が広

範な分野に応用されるようになったのでしょうか。水を導くには水

が必要があるけれども、電気なら針金を接触させるだけでよいし、機械を製作するには歯車を削るなど面倒な作業が必要だが、電気製品は基本的に部品を適当にネジ止めしたり、半田付けするだけで足りる便利なものだからと或る人は言うかも知れません。確かに工作や

取り扱いが便利だと言うのは大きな理由ですが、もっと深い根拠があると思います。

それは世の中のあらゆる物質が根元的に電気と関係しているからではないでしょうか。古代ギリシヤの哲人デモクリトスが物質はアトムから構成されると想像したように、現代の物理学によれば物質はクォークとレプトンおよびそれらの相互作用を司るゲージボソンから出来ていると言っています。尤も、サブクォークとか超弦という考え方もありますが現在の所このように捉えておいてよいと思います。クォークとレプトンはそれ以上細かく分割できないという意味で現代におけるアトムですが、実験によると、クォークはそれ自身では単独に存在しないので、現実的にはクォークから合成されている陽子や中性子などのハドロンの方がアトムと言えるかも知れません。ということは、物質界の諸現象を理解するには、

主として陽子や中性子およびレプトンの代表である電子の働きに注目すれば、ほぼ足りるという事でしょう。

現在、物質を構成する力として強い力、弱い力、電磁気力および万有引力の四つが知られています。強い力はクォークの色(電)荷の間に働いて原子核を構成し、弱い力は全ての素粒子に作用しますが、原子の大きさ以上のレベルでは非常に小さくて無視できません。言い換えると、強い力と弱い力は、物質を構成するために必須のもですが、それらは原子以上の大きさの物には直接現れず、還元論的に考える限り、陽電気を帯びた核子(陽子と中性子)および陰電気を帯びた電子の働きに着目すれば、我々が日常観察している自然現象は殆どすべて、それに基づいて理解できる筈だと言う事になります。一般に万有引力は電気の力に比べて大きいと思われていますが、途轍もなく小さいものです。一正(一億の五乗!)分の一です。引力はこんなに小さいのに、電気に比べて大きいように見えるのは奇妙です。それは、陽子と電子の正負の電荷量が(殆ど?)正確に等しいからです。つまり、通常の物質では、正負の電荷が打ち消しあっている、電気が働かないように見える訳です。引力が問題となるのは、地球規模の天体が関与する場合だけです。事実、人口

衛星の中のように(万有)引力が全くない所でも、我々の見る物質の様相はそんなに変わらず、我々生物も生きて行くことが出来ま

す。要するに、我々が扱う物質の性質は、量子効果を含めた電磁気力だけで略規定されると言えます。核子に対する電子の運動と電磁気力が釣り合って原子が構成され、それらが集まって分子が成立するのも電子の働きによることは、物理あるいは化学の教える通りです。水のような無定形な液体が出来るのも、ダイヤモンドのように堅固な結晶ができるのも、電磁力の広範性を示しています。伝導度のよい金属に対しガラスのような絶縁体が出来るのも、電磁気力による原子配置に基づく事は、説明するまでもありません。相対論において、光速だけが何故それ程の特権が与えられるのか訝る向きも多いのですが、上のような事実を反省すると納得できるかと思えます。否、電気・磁気は時空の性質をも規定していると言つて差し支えないでしょう。遍在性を持つ電磁気も前述のような潜在性の故、その性質が明らかにされたのは力学より遅れましたが、前世紀の中頃には、マクスウェルの方程式によって電気と磁気の数学的基礎は確立されました。それから一世紀半、あまたの基礎的および応用的研究がなされ、も

う電気・磁気は知り尽くされたかのように考えられています。果たしてそうでしょうか。

ちよつと基礎的な所に眼を着けると、次々と不思議なことに気付かされます。例えば、私が子供の頃、真空管の働きについて父に尋ねた時、電子が陰極から陽極に走ると陽極から陰極に向かって電流が流れると、父は然り気なく言いました。子供心に、では電流とは一体何だろうと腑に落ちなかつたのですが、大学で電気を専門に勉強するようになっても気になるものの一つでした。そんなこと尋ねるのは愚かだと言ふのは抜きにすると、常識的には、フランクリンが電気の符号を逆に名付けたからだとか、そのように考えても電気の理論として困る事はないからだと、言うのが普通の答えでしょう。そうなら何故困らないのかと、また次々に疑問が出て来ます。ここでは詳しく解説する余裕はありませんので、老子の文章「無名天地之始。有名万物之母。」を挙げておきます。これは、万物の根源的な在り方について述べている個所ですが、老子の透徹した洞察力は電磁気の根源性をも貫いています。また別の観点から、電流は水流に喩えられるように、電流は金属導体の中を流れると思われ勝ちです。が、超伝導体の場合を考えると、導体の中ではなく表面を流れる事実も暗示的です。水道管の

近くに物を近づけても特に反応は起こらないのに、電流が流れている近くに磁針を持って来ると感応します。しかも、磁針は電流の流れる方向を向かず、それに垂直になるのも頭を傾げさせます。その向きはフレミングの法則によって決まる事実は、電磁気(左右)非対称性があるのかという疑問を抱かせます。この疑問と先程のフランクリンの符号の件とは関連しています。

このような一連の事実を観察すると、水が金属管の中を流れるのに対して、電気は外の空間を流れると表現する方が妥当なように思えます。まさしく、電流の周りに或る種の旋風が吹き荒れている、とエールシュテッドが想像したように。ところで、磁針に及ぼす力は電流の代わりに磁石に置き換えたものと同等で(ある事が知られていま)す。すると、磁石から発する静磁界も止まっているのではなく、(直流)電流から発生する磁界と同じく激しく動いているに違いないと想像されないうか少し工夫を凝らすと、数学的にもそれを証明する事が出来ます。このように、電磁気を少し根源的に調べて行くと、今まで知られていなかった驚異的な性質が次々と現れて来ます。それらの結果を参照すれば、電磁気学の基礎に関する幾つかのパラドックスが解消するのみならず、前世紀から議論

が続いている懸案も解けます。その要点は既に学会に報告しましたが、学会に報告し難い物理的理解あるいは考え方とでも言うべき所は、文系的な科目とも繋がっており、電磁気学の初学者にも興味を持って貰えるのではないかと思います。苔むすと言つても、電磁気学は電気を学び、それを応用する者にとつて避けて通ることの出来ない道です。地味で骨の折れる仕事ではありますが見えないものを見えるようにして、学習を楽しく解り易くする事も大切ではないでしょうか。それに、基本的な創造の種は、このような古くて新しい土壌から芽を出すように思えます。

新しい世紀に向けて学問の総合化が謳われている現在、水面上の総合化のみならず、水面下の繋がりを発見するのも必要でしょう。静まり返った水底(物事の根底)に眼を注ぐと、喧騒の地上とは異なった平和な活力の源がある事に気付けるのではないのでしょうか。今後とも、より広い立場から仕事を続けて行く所存ですので、ご理解とご支援の程お願い致します。

日比エネルギーフォーラム
に参加して

真部利應(昭43年卒)

10月下旬の土曜日、マニラ市内のホテルにおいて日本とフィリ

ンのエネルギー担当の政府役人、電力会社、独立発電事業者及び公社の代表ならびに学識者が出席してエネルギーフォーラムが終日開催された。

このフォーラムは、私は初参加であったが、2年に1回中国、東南アジアのいずれかの国で開催、エネルギー政策について意見交換を行い、併せて交流を深めようとするものである。主催はアジア・太平洋エネルギーフォーラムで今回はフィリピン電気事業連合会との共同開催であった。

アジア・太平洋エネルギーフォーラムの代表幹事は、政府諮問委員会の電気事業審議会でお馴染みの末次克彦氏である。同氏の政治力を示すように、フィリピンからは、エネルギー省の大臣他各界からの代表20名が、日本側は、資源エネルギー庁の業務課長及び東電の常務他電力、メーカーから30名が参加する大がかりなフォーラムであった。

フォーラムの主題は、エネルギー事業への投資とリスクマネジメントであったが、他に両国の規制緩和への取り組みや地球環境問題への対応も盛り込まれており、朝の9時から夕方6時までのテーマとしては少し欲張り過ぎた感があったが、ほぼ定刻に討議は終了した。

私が勤めている九州電力は、現在フィリピンでの地熱発電事業を

目的に現地調査を行っていることもあり、事務局サイドから当日、ぜひプレゼンテーションをと頼まれた。フォーラムの前夜10時過ぎにホテルの自室の電話が鳴るの、今頃何事かと不審に思いつつ受話器を取ったところが、事務局からのたつての依頼であった。突然でもあり直ぐには準備も出来ないからとお断りしたものの、先方は、既にアジエンダに私の名前を刷り込んでしまっており、今更変更はできないとのこと、やむを得ず引き受けることにした。そこで九州電力は、地熱の開発技術には長い歴史があり、経験も豊富であることを訴えることにし、ついでに配電技術の近代化への取り組みについても、この機会に少しPRをさせて貰うこととした。

海外へは今回で6度目であるが、アジアは初めてであり、社会面、衛生面などいろいろな面で関心を持っていた。当初の予定では、フィリピンに引き続きベトナムまで足をのばすこととしていたが、私のみは業務の都合でフィリピンで引き揚げることとなり、結局マニラで2泊3日の空港とホテルを往復するだけの慌ただしい、当地のことは何も分からない滞在であった。そのような状況で彼の国を論じては失礼とは思いつつ敢えて気づいた点に触れさせていただく、

・空港の警戒が厳しい(空港ビル

へ入る時には警官からパスポート、航空チケットの提示を求められる。)

・幹線道路の渋滞(空港からホテルまで約10kmの距離を金曜日の夕方にマニラに到着した一行は2時間を要した。私は昼過ぎだったためか40分で済んだ。)

・交通信号機が殆ど無い(ホテルまでの距離で3箇所であった。上下合わせて6車線の車道を信号機の無いところで人が横断しなければならない。また車もそのような所で左折、右折をしなければならぬ。)

・道路に溢れている車の7割以上が、トヨタ、ホンダ、三菱など日本製の乗用車、トラックであるが、型式はかなり旧くエアコンの無い車のほうが多いと見受けられた。乗り合いバスは、台数が多いがその殆どは相当な年数がたっており、しかもエアコンが無いため、窓を開け放って排気ガスだらけの渋滞した道路を走っている。このような国に大量の車を売りつけて我が国の繁栄があるのかと今更ながら考えさせられてしまった。

・周辺の住宅は、相当に傷んだトタン屋根のみすぼらしい家ばかりである。表通りに面した商店街も、もし日本であれば、誰も立ち寄らないのではないかと思う程、雑然としており、かつ衛生状態も保証の限りでないとい

う雰囲気であった。新国際空港や外国人が主に宿泊するホテルの近代的な建築物との落差を、現地の人はどのように思っているのだろうか。

以上はあまり良くない方の印象であるが、これに対し、空港の周辺でタクシートの乗り場を教えてくれた人や私が行きつ戻りつ銀行の両替出張所を捜していると様子でそれと分かるのか、尋ねもしないのに手で示してくれた人達は、顔つきは愛想笑いのない強面であるが、心の中は日本人に負けない暖かきがあるのかも知れないと思

い、国民性については外見だけで判断できないと反省した。とにかく、帰国後少しお腹の調子を悪くした程度のマニラ行きであったが、日本が物質的にいかに豊かであるかを感じると同時に、我が国の多くの方、特に若者にぜひアジアの実情を知ってもらい、我が国の繁栄を末永く節度ある形に持って行って欲しいという願いが生じた。

自転車から見た

京都の魅力について

松本孝史(平5年卒)

木の葉が色づく季節になると、週末には自転車で乗り、北摂地域の山々や神社仏閣へと出かけます。昼食を済ませた後の3時間程度のお手軽なサイクリングです

が、この季節は暑くもなく寒くもなく、実にさわやかなサイクリングを楽しむことができます。春に草木が芽吹く景色を眺めながら自転車で乗っている時も、何か自分まで生き生きとして来るような感じで、とても気持ちのいいものなのです。それが、それにも増して秋のサイクリングは、もみじなどの紅葉が美しく、それをゆっくり眺めながら走ることができ魅力あるものです。また、紅葉で有名な寺院へ出かけた時なども、乗用車のよう

に渋滞でイライラすることもなく、しかも、家に帰った後のビールが格別においしい。いいこと尽くめではないでしょうか。

ところで、私が自転車を始めたのは、大学に入学したとき、高校の友人に誘われサイクリング部に入部したのがきっかけでした。最初は「サイクリング」という、何かさわやかなイメージのする言葉から、新緑の高原を仲間と話でもしながら自転車で乗るといふようなものを想像していたのですが、そのクラブは、テントや寝袋などキャンプ道具一式を荷台に積み、何週間にもわたってツーリングをするという活動がメインであり、こんなことをするのかと少なからず驚きました。しかし、これがやってみると結構楽しい。1回生の夏に北海道に行った初めてのツーリングで、フェリーから降り、走り始めた時こそ、あまりの荷物の

重たさにふらつき不安になりましたが、半日もするとそんな不安はどこへやら、初めて見る北海道の広い景色に感動して夢中でペダルをこいだのを今でも鮮明に覚えています。

こうして大学在学中に、ほぼ日本全国を自転車でもまわりましたが、実に多くの人と接することができました。また、雨の日には家に泊めて頂いたり、よほど貧乏に見えたのか、たくさんの食べ物をお願いしたりと、人の温かさというものを感ずることができました。このような旅行は、時間に余裕がある学生のようにしかできないものであり、貴重な経験であったと感じております。

在学中には、遠方ばかりでなく京都市内にもよく出かけました。哲学の道をはじめとする琵琶湖の疏水沿いや東山の寺院、京都市を一望する愛宕山、そして北山。これほど歴史があり景観にも優れた街は、他にはどこにもないと思います。特に北山には、山の奥深くに分け入っても祠や地蔵がそこかしこにあり、昔、この山道を多くの人が行き交ったのかと、古の人々の生活のにおいを豊かな自然の中に感じることが出来ます。京都から離れてみて、初めてこのような京都の趣の深さに気が付いたような気がします。

さて、社会人になってからという、さすがに学生の時のような

長期間のサイクリングに出かけることはできず、日帰りで近郊サイクリングが中心となってしまいました。最近では、その回数も次第に減り、春と秋の季節のいい時しか自転車にまたがることはなくなりました。体力も衰え、お腹も少し出てきたようです。中年への第一歩というところででしょうか。しかし、健康は全ての活動の源です。これからも健康のため、自然とのふれあいを大切にすため、未永く自転車とのお付き合いをしていきたいと思えます。また、春には久々に京都の山々にも妻を連れて出かけてみたいと思えます。

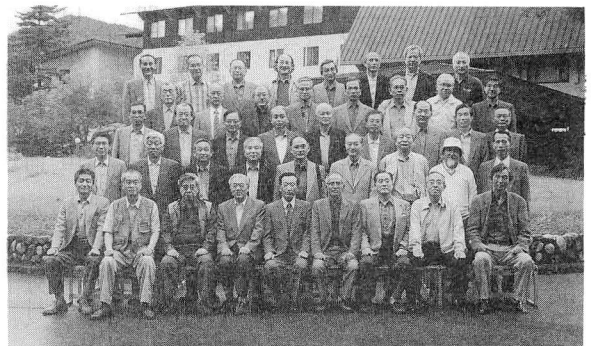
◎お断り

「戦中派の学生生活(区)」は今回もお休みいたしました。

同窓会だより

卒業40周年記念同窓会

山々が秋色をおび始めた10月2日、3日、電気・電子昭和34年卒業生の40周年記念同窓会を長野県大町市の「くろよんロイヤルホテル」で行った。折しも9月30日に東海村で臨界事故が発生し、世の中は騒然となり日立方面在住者の中は騒然と危ぶまれたが、対象者71名



京大電気・電子昭和34年卒業40周年同窓会
平成11年10月9日
於 くろよんロイヤルホテル

中43名が予定通り参加し、又、同期生で現総長の長尾真君の参加もあって大盛会となった。

2日昼過ぎ松本駅に集合、早速バスで信州そばの老舗に向かい今年採れたてのそばに舌鼓をうった。空は澄み切った秋晴れで、バスから見える信州の山々が実に美しかった。安曇野ではIMAXシアターや広大なわさび農場を見学し、日暮れにホテルに到着、直ぐ温泉に入ってくつろいだ気分になったのち宴会となった。

宴会はバイキング形式で、長尾総長から京大の近況、上田皖亮君(教授)から教室の近況報告があり、その後欠席者の消息紹介や東京方面の活動状況の話などが相次いだ。そのうち西島誠一君が、わざわざ持参した昔懐かしいクラス

雑誌「じえいおめが」や全員の在学当時の「ADDRESS」ブックを披露するに及んで同窓会は大いに盛り上がり飛び入り発言が続いた。最後は、全員肩を組み輪になって懐かしい歌の合唱でフィナーレとなった。次回はそろそろ暇も出てくるので5年毎を3年に短縮し、東京方面での開催を決めて散会した。

翌3日は、夜半の微雨も上がり清々しい朝となった。ホテル前で記念写真を撮ったのち黒四発電所を見学する技術見学会組、立山・黒部アルペンルートの探勝組、帰途につく組と3つに分かれて出発した。関西電力並びに伊藤俊一君の尽力で黒四ダムから発電所の心臓部まで奥深く入れていただき、黒部川電力所・野原所長(聴講生)が自ら案内役をされ、大変分かり易い説明と壮大な施設に技術見学会のメンバーも大満足であった。樺平から宇奈月までのトロッコ電車で、紅葉には多少早かったものの黒部の渓谷美を存分に楽しんだ。

見学会は宇奈月で流れ解散になったが、ゴルフ組は更に4日、富山の名門・呉羽ccで秋晴れの好天気の中プレーした。連日の疲れか、スコアは皆バツとしなかったが、口だけは達者でもっぱら舌戦の感があった。

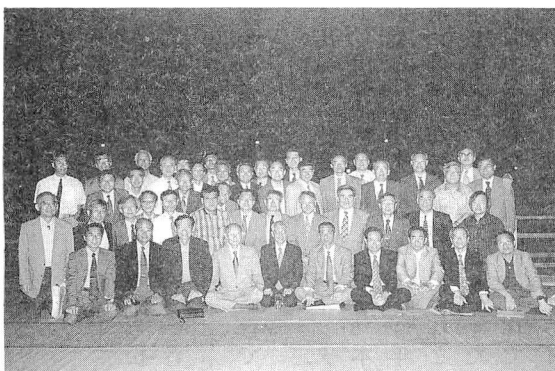
なお、特筆すべきは今回名簿にFAX、電子メールアドレスも入れ、

同期生の連絡が一層スムーズに出来るようにした事である。新しい2千年代を共に仲良く生き抜いて行きたいものである。

宇田裕重(昭34年卒)記

卒業35周年記念同窓会

昭和39年電気・電子工科学部卒業後35周年記念同窓会を8月21日に京都木屋町の「幾松」で開いた。夏休み中の方が集まり易からうという事で大文字の済んだ頃を選んだ。学年主任の大谷先生はご病氣中であつたが同主任の池上先生、洛友会会長の近藤先生、またお忙しい中を総長の長尾先生にご臨席を頂いた。直前4名のキヤンセルはあつたものの卒業生86名の内44名と過半数、これまで最高の出席者数であった。先生方



からは日本の将来に対する不安、最近の学生の質の低下への懸念（これは三先生とも憂いてられた）、これからの大学の在り方の模索などのお話があり大学も変わらなければならないと感じた。

その後自由懇談。食事はそつちのけで議論に花が咲いた。話題は会社の業績、リストラ、再就職、定年後の過ごし方などなど、大部分の者が第二の人生に移ったものの健康を害している者も少なく、鬼籍に入った者も一名だけで一同元氣。二次会も祇園の「鐸」で34名と一階では満員で二階も借りる始末。三次会は大グループの一つが14名、ホテルに帰ってからまだラーメンを食べに2時頃まで出た者達あり。翌日は早くから瀬田ゴルフ場に出た者も3組ありと久しぶりに旧交を温めると共にエネルギーを発散した。このゴルフ会は三九会と名付け、毎年やるうという事で次回は辻、黒田氏が幹事に決まった。希望者は連絡して下さい。

今回電子メールを活用して会合の連絡をしたがメール可能な者が85%と流石電気・電子出身者達であった。5年後にはどうなっているだろうか。

次回5年後京都での再会を期して散会した。実に楽しい一日であった。

留岡 寛(昭39年卒)記

昭和24年卒50周年クラス会

我々のクラス会は夫婦同伴で毎年関西、関東、その他と回り持ちで開催しています。

今年卒業後50周年にあたり、99年11月15日京都リーガロイヤルホテルで、近藤先生をお招きし、盛大に催しました。

卒業者57名、物故者11名、(生存率80%)出席者37名(夫人、ご遺族含)、直前にご逝去された江口潤君のご長女児玉智子様も出席されました。

近藤先生のご祝辞『このクラスは、それまでの旧制高校の出身者ばかりのクラスと全く異なり、軍関係の学校並びに旧制工専出身者も多く居り、大部分の人は兵役に服した経験を持ち、中には佐官の人や既婚者も居た。期末試験の時ウイスキーの瓶を机上において受験した学生が居たが、注意すると「一杯やらぬと良い知恵が生まれん」との答えで、二の句が継げなかつた』とのエピソードその他我々のクラスのヤンチャ振りが披露されました。

翌日は比叡山根本中堂に参詣しました。また50周年を記念して150頁の記念誌を刊行しました。クラス会員の他、ご遺族全員の回想文、級友の追悼文も掲載してあります。残部が少々ありますのでご希望者は、電話03-3467-15730北野豊までお申し越し下さ



写真上段左より岡田、伊藤、森井、吉田(祝)、関、岩村、近江、安房、北野、松村、門脇、久保、中野

中段左より小原、井土、飯田、舟田、林、三浦、永見、野村、川口、生駒、松山、太田(実)
下段左より生駒夫人、森井夫人、関夫人、故加藤夫人、近藤先生、野村夫人、北野夫人、川口夫人、岡田夫人、浜田夫人、伊藤夫人
生駒 鉄郎(昭24年卒)記

支部だより

中部支部家族同伴秋の例会
伊勢志摩国立公園と「志摩スペイン村」を訪ねる

11月6日(土)は中部支部の秋の例会、伊勢自動車道の全通・整備により、伊勢が近くなったので、数年前、伊勢神宮参拝と「祭り博」に続いて今年も開園50周年の「志摩スペイン村」を目的地として途中「伊勢志摩スカイライン」経由、伊勢志摩国立公園の絶景を楽しむことにしました。

参加人員は16名、常連の川端先輩(昭和8年卒、趣味の俳句は師匠格「むいつ」の俳号、会報にも寄稿されています)が体調を崩されたほか都合の悪い方が多く、やや淋しい会になりましたが、代わり前に前原幹事のお孫さんの参加で一挙に参加者の平均年齢が下がりました。

名古屋駅前を8時半出発、カスミインターから名古屋都市高速に乗り、5分後には名古屋西インターから東名阪自動車道です。名古屋と関西を結ぶ高速道は昭和39年開通の名神高速があるだけで南はこの東名阪と大阪の西名阪がありすが中間が一般国道になっており、渋滞解消には一日も早い第2名神の開通が待たれます。

東名阪は関町の亀山まで、此处から一般国道を少し走って、亀山ジャンクションから伊勢自動車道に入ります。途中渋滞もなく大野支部長ご心配のデラックスバスは、鈴鹿山脈を右手に見ながら伊勢平野を快適に飛ばし、車内は顔なじみばかり会話は弾みます。

最初の休憩地は安濃サービスタです。バスガイドさんは一年生、当地区は初めてとあってガイドブック片手に安濃の農林試験所、松阪名物の松阪肉、そして国文学者本居宣長から伊勢神宮の千木、鯉木の説明までサービスタ満点です。

出発から約2時間伊勢西インター、伊勢神宮内宮の入口です。本来ならば参拝すべきところ、5年前(御遷宮なった伊勢神宮参拝と祭り博見学)すましており、また時間の余裕もなく、今回は遥拝でお許し願って伊勢志摩スカイラインに入りました。

つづら折りの山道を上ること約20分朝熊山山頂近く金剛証寺に着きました。伊勢神宮の鬼門を守る寺として神宮の奥の院と言われています。「お伊勢参らば朝熊をかげよ、朝熊かけねば片参り」と伊勢音頭に唄い継がれ昔は参宮する人々は当山を参詣するのが常でした。

当山の開創は欽明天皇の頃、後に弘法大師が真言密教の大道場を開き、金剛証寺(825年)となりました。その後衰退しましたが応永年間(1400年頃)鎌倉の仏地禪師が再興、禅寺として現在は臨済宗南禅寺派の別格本山です。本尊、虚空蔵菩薩は日本三大虚空蔵菩薩の第一位、福德、知恵を授ける現世利益の仏様で伊勢神宮の御遷宮の翌年に20年に一度の



御開帳が行われます。

本堂摩尼殿には本尊虚空蔵菩薩と本堂内陣に天照大神をお祀りしてあります。参詣道の右側に弘法大師が掘られたと伝えられる連間の池とその池に朱塗りの太鼓橋がかかっておりこの橋を境に聖地と俗地に分かれています。

一同参拝をすまし、すぐ上の展望台にバスで移動しました。海拔五〇〇米、鳥羽湾から伊良湖水道に向けて、伊勢志摩国立公園北部の絶景が広がります。条件が良いと富士山がみれるそうですが、生憎のガス、遠望は無理です。展望台で記念写真を撮りました。

11時半展望台を後に、つずら折れの道を、リヤス式の海岸線を垣間見ながら下り、鳥羽経由目的地のスペイン村に着いたのは12時を過ぎていました。懇親会はスペイン村の入口、ホテル志摩スペイン

村、スペイン村にマッチした豪華な建物です。ただし参加者は年寄りが多いので料理は志摩の海の幸一杯の日本料理です。本日の最高

齢、昭和21年卒の大須賀さんの御発声で乾杯、何時までも健康でこの行楽会に参加できる事を喜びました。恒例「近況報告」車内で殆どすましてるので、2、3の人だけで省略、和やかな歓談が続きます。お話は尽きませんが13時半、

本日のメイン会場スペイン村へ、ホテル側入口は一般エントランスから離れた西側、右手に世界最大級の「つり下げジェットコースター」(スペインとフランスの国境、ピレネー山脈を形どったもの)を見ながら、大歓声(悲鳴)を聞きながら入村です。

中は自由行動、好天の土曜日とあってかなりの賑わいの中、期せずして殆どの会員が2時からのアトラクション、「ロストレジェンド広場」に集まりました。ロストレジェンドはスペイン伝説の失われた大陸を舞台に繰り広げられる火と水と振動、轟音で繰り広げられる一大スペクタクルショウ、大人も子供も充分堪能の20分でした。

カルメン通りを抜け、ハビエル城博物館です。フランシスコ・ザビエル(1549年、鹿児島に上陸日本に初めてキリスト教を伝える)が生まれたハビエル城を忠実に再現しており、スペインの歴史や芸術を紹介

します。ハビエル城から長いエスカレーターで下るとコロンブス広場です。大きな池ではアドベンチャーラグーン、小舟で海洋冒険が楽しめます。此処は広大なスペイン村の最奥部、もう集合時間まで30分、後は駆け足でマヨール広場、シベレス広場とスペインの都市を通り抜け、ホテル玄関のバスに帰りま

します。

ハビエル城から長いエスカレーターで下るとコロンブス広場です。大きな池ではアドベンチャーラグーン、小舟で海洋冒険が楽しめます。此処は広大なスペイン村の最奥部、もう集合時間まで30分、後は駆け足でマヨール広場、シベレス広場とスペインの都市を通り抜け、ホテル玄関のバスに降りま

契とは行きませんでした。好天に恵まれ、楽しい秋の一日を過ごすことが出来ました。3時半予定より30分遅れでスペイン村を後にし、伊勢道路、伊勢西インター經由名古屋に向かいます。途中渋滞もなく、東名阪・御在所SAで小休止、6時半、名古屋駅前へ帰着しました。早朝から高齢の会員にはややきついスケジュールでしたが、全員元気で又来年の再会を約し、解散しました。

石川 進(昭26年卒)記

中部支部ゴルフ会

第15回本多杯(5月に亡くなられた本多大先輩の寄贈杯)として10月3日(日)に名古屋緑区の鳴海カントリークラブで中部支部のゴルフ会が開催されました。

予報より好天になり、曇り時々晴のゴルフ日和でした。故障者が多く、12名の予定が7名になったので、知己に声をかけ

ゲスト5名を確保しました。このゴルフ場は距離は短いですが構造的にホールもあり、2桁のスコアの人が少なかつた。新ペリア方式でハンディを決めたが、隠しホールに泣いた人、笑った人等様々でした。

優勝は昭27年遠藤氏でした。プレイの後簡単なパーティで歓談、散会しました。

遠藤 茂(昭27年卒)記

関西支部家族見学会記

夏の暑さの残る9月5日(日)に洛友会関西支部の家族見学会が行われました。今年の見学会は和歌山県で開催されている南紀熊野体験博の見学をメインに南方熊楠記念館、とれとれ市場を観光するコースで行われました。当日は真夏を思わせるような陽気で参加者の皆さんは汗だくになりながらも休日の一日を楽しまれました。

1. 出発

参加者総勢164名は京都駅、新大阪駅と分かれて集合し、オーシャンアロー5号で一路和歌山県白浜方面へ向かいました。1年に1回、この家族見学会の時顔を合わせるような方や何年かぶりに旧友に再会するような方も見られ、行き電車の中から大いに盛り上がりつつありました(ビールの勢いもあつたのかな?)。JR白浜駅に到着してから観光バスに乗り換え、昼

食場所であるコガノイベイホテルへ向かいました。

2. 昼食

コガノイベイホテルでは宮本支部長、近藤会長、大嶋副会長の挨拶の後、昼食をいただきました。電車での長旅の疲れも見せず、皆さんの食欲旺盛なこと。あつという間に昼食の時間は過ぎていきました。ホテルの庭では当日、たまたま若いカップルの結婚式が行われておりその様子を見学させていただきました。ただ、ことができませんでした。

3. 南方熊楠記念館

和歌山県が生んだ世界的に知られる博物学者である南方熊楠、その記念館は田辺湾を見渡せる丘の上になつていました。中紀バス観光社さんのご厚意でいただいた熊野詣の杖を手に急な坂道を歩いて登ること約10分、汗だくになりながらも記念館に到着しました。南方熊楠は和歌山生まれの博物学者で、特に植物学、微生物学に大きな足跡を残しました。驚異的な記憶力の人で記念館には少年時代に5年がかりで書き写したといわれる「和漢三才図絵」(江戸時代の百科全書、105巻)の抄写本や死後解剖された熊楠の脳の写真を見ることができました(特にしわが多いような脳ではないようでした)。また、記念館からは田辺湾の青く澄んだ海を見渡すことができ、ちよつとした休息をとることができました。

の主力幹事2名がご逝去になりG/A中止の宣告もされましたが当時の支部長等のご要望に基き学年幹事役の私が改めて20数名のグループ同窓のご意見を取まとめました結果、新しいメンバー約30名で現在のG/Aが再スタートする事となりました。

(2) 平成8年度〜10年度(3年間)の実績について

・平成8年度

(a) 会合の内容、開催回数、場所及び予算処置につき討論の結果、①回数年2〜3回、②形式当面懇親会、将来は外部講師の講話も考える、③会場は当面学士会館、④会費等・補助金も含め参加者の均等負担とする、などでスタートすることとしました。

(b) 実績…10月及び2月の2回開催、参加人員(延24名)でした。

・平成9年度

(a) 会合のテーマ等①永安担当の「健康増進のためのシナリオ」テーマで約60分提言と討論②日野晴夫氏(昭15卒)担当「アメリカの日本占領政策の反省点」のテーマで約40分提言と討論

(b) 実績…11月及び3月の2回開催、参加人員(延31名)でした。

・平成10年度

(a) 会合のテーマ等①石谷昇氏(昭14卒)担当「シネ(ビデオ)クラブへのお誘いと利用機材に就いて」のテーマで約40分提言と討論②副島敏夫氏(昭13卒)担当

「中国に対する欧米列強の鉄道進出史」のテーマで約80分提言と討論

(b) 実績…10月及び3月の2回開催、参加人員(延30名)でした。

(3) グループ活動(G/A)に関する考えかた

前記の3年間の実績を経験しまして私なりの本件に関する「まとめ」は次の通りとなりました。関心を持たれた同窓有志諸兄のお考えもお聞き出来れば誠に幸甚と考えております。

・G/A例会等の年間回数…参加者が同窓に会いたいな!! と思う程度の間隔、即ち年2〜4回程度と考えます。

・開催場所…交通の便の良い処が第一ですが、会場費の合理性も大切と考えます。

・例会の主要テーマ…①健康増進に関するもの、②趣味に関するテーマ、③歴史(日本史、世界史)に関するテーマ、④最近の新聞又はテレビ話題に関するテーマ、⑤関心の高いスポーツ関連のテーマ等参加者の希望も参考に入れて選考する事。

・会費及び補助金に関して…支部からの補助金は公の金銭の為幹事は期限内に処理せざるを得ないので、活動の安定化には大変役立つように考えられます。

永安 弘 記

「五九洛会」報告

幹事 朝比奈隆(昭28年卒)

「五九洛会」は洛友会東京支部の昭25〜昭29卒の6クラス(昭28年は旧制と新制の2クラス)の会員で構成しております。グループ活動の世話役は各学年幹事6名が担当し、その内1名が毎年交代で五九洛会幹事になります。

会の名前の由来は昭25の五と昭29の九をとったものですが、会員からの電話を取り次いでくれた女性に「極楽に行ける会ですか?」などとひやかされたこともありあります。

さて、会の行事ですが、設立当初は諸先輩がご苦勞なされ色々行われましたが、昨年で21回となり、近年はほぼ定着し、毎年、幹事会1回、総会1回を開催しております。幹事会は5月頃開催し、総会の打合せ、会計報告、幹事引継ぎの他を行い、総会は9月頃開催し、会員の中から講師を選び講演をして頂き、終了後懇親パーティーを行います。平成10年度の総会の状況を以下報告致します。

行事名…第21回五九洛会
開催日…平成10年9月25日(金)
18時20分〜21時00分
場所…東京目黒区
沖電気目黒クラブ
参加人員…37名
内容…技術講演会および懇親パーティー

懇親パーティー

(1) 講演会
講演テーマ 激動下の世界情報通信
講師 岩崎 弘三氏(昭28卒)

(財)日本「C」協会前専務理事
内容 世界各国の電気通信事情、特に急激に発展しているアジア地域を中心に各国の状況、トレンド、欧米諸国との比較を各種のデータに基づいて説明され、今後の動向にも言及された。

(2) 懇親パーティー
講演後、同クラブ内のパーティールームで立食パーティーを行い、アルコールが入ると共に大変雰囲気盛り上がり、会員同志の親睦、講師を取り囲んでの質疑など充実した時間を過ごすことが出来ました。

朝比奈 隆 記

「みとおし会」「昭30〜昭34卒」

幹事 葉原 耕平(昭30卒)

魚住 董(昭30卒)

森安 正司(昭34卒)

吹抜 敬彦(昭34卒)

例年、年1回総会と称して講演会と引き続いて懇親会を開いて、会員の親睦を図っています。毎年参加者が増えてきて喜ばしい限りです。今年7月15日(木)に総会を開き、木村美恵子先生の講演を行いました。

昨年は以下のように総会を開催しました。
総会開催日…1998年7月31日

18:00〜20:30
場所…沖電気目黒クラブ
(目黒研修センター)
参加者…36名

講演(講師)…黒岩浩一氏
(住友商事・昭33卒みとおし会員)
(演題)…中近東・イスラム・中央アジア雑感

(内容)…①本田勝一氏のこと、②サダムフセインと米国、③イラント米国、④イスラム教について、⑤中近東の「南北戦争」、⑥イスラムと中央アジア・コーカサス、⑦結び。

貴重な石油資源やイスラエル問題を抱えて世界の火種になっているため、強い関心を持つ必要があるにもかかわらず、日本人には中近東はよく判っていません。黒岩氏の豊かな実地経験に基づく講演により、イスラム流の考え方、イスラム教内部の対立、貧富格差に基づく問題等をわかりやすく説明いただけたと思います。

小西 達夫(昭33卒)記

これら東京支部における各趣味の会やグループ活動の詳細は、支部ホームページに随時掲載していきますので、参加ご希望の方は電子メールなどで各会幹事にご連絡ください。また他の支部の方も、上京された折には飛び入り参加も可能ですし、支部対抗の交流戦なども受けて立ちますので、ぜひご一報ください。

以上2号にわたってご紹介して

きましたように、洛友会東京支部では各種イベントや、活動を活発に行なっています。ぜひ一度各種イベントや活動に参加いただきませうようお願いいたします。今回は、支部の活動の一部をご紹介しますが、今後の会やグループについても随時ご紹介してまいります。

なおこれらの活動は、皆さんの会費をもとに運営されています。今年度未納の方は会費納入をお願いいたします。皆さんの洛友会をさらに親しみやすいものにするために、ご意見やご感想をお待ちしています。

総務幹事 濱野宏 (昭55年卒) 記
支部ホームページアドレス
(<http://www.2.gol.com/users/hirakuyukai/>)

東京支部旅行会報告

冬の訪れも近い頃ながら、絶好の天気に恵まれ、11月20日(土)に洛友会東京支部の旅行会を開催しました。

1. 冬桜観賞と豆腐作り見学

前日まで雨かと思われていた天気ですっかり快晴となった朝、7時30分という早い集合時間にもかかわらず37名が定刻に全員集合、出発。関越道を本庄児玉まで走り、定刻通り神流湖沿いの城峰(じょうみね)公園に到着。

城峰公園は、晩秋から初冬に掛



けて開花する珍しい「冬桜」で有名な公園です。この桜は気温の寒暖差により3〜5分咲きの花を持ち、小さな八重の花をつけます。我々が訪れたときは、花は木々の上部にちらほら咲きの状態でしたが、丁度紅葉のきれいな時で、紅葉と桜の混ざった風景の妙がありました。

この後バスで20分のところにある、有機栽培の豆腐、みそ造りの「御用蔵」見学、神泉町のおいしい水と完全有機栽培で得られる豆で作られた、豆腐、みそ、しょうゆの製造の見学、試食を行いました。豆腐、湯葉の本場といえ、もちろん京都となるわけですが、かぐわしい麴のよい香りが漂う中で試食した豆腐、湯葉は大変美味でした。多くの方がみそ、しょう

ゆを購入されました。筆者も生湯葉1本買いました。

2. 松茸懐石と長瀬ライン下り

午後は趣を変え、一路秩父を越え、巴川温泉郷の高台にある「松風亭」にて昼食。風雅な部屋で、松茸を盛り込んだ懐石料理を頂きました。料理のあとは松風呂に入浴。秩父市内を眼下に見下ろしながら、リラックスタイムを過ごしました。

最後は長瀬に場所を移し、「長瀬ライン下り」です。水量は季節柄十分ではありませんでしたが、2艘に分乗し、溪流両側の紅葉を眺めながら3km、30分の船下りを楽しめました。驚いたことに水面から5mほどの高さの場所の枝のあちこちにごみや布切れが引つかかっている、これらはすべて8月の豪雨のつめあとでした。あらためて自然の猛威を感じました。

その後おみやげ屋さんをしばらく巡り、豆やしやくしな漬けなどの名産、秩父の銘酒やワインなどをそれぞれ購入され、一路東京へ戻りました。途中渋滞はあったものの、花園インターから、関越道を東京に向けて走り、東京駅には予定の40分遅れの午後7時40分に到着。無事解散いたしました。

ご参加頂きましたみなさまに厚く御礼申し上げます。また旅行会の無事遂行にご尽力いただいた「はとバス」のみなさまはじめ多くの方々へ深謝いたします。至ら

ぬ点も多々あったとは存じますが、今後とも楽しい会を企画してまいりますので、これに懲りずにまたご参加いただきますようお願い申し上げます。

大橋 正良 (昭56年卒) 記

事務局だより

◎新しい名簿の発行

平成12・13年度版の名簿が各支部長はじめ幹事の方々のご協力により完成しました。厚くお礼申し上げます。早速会員の皆様にはお届けしましたが、未着の方は事務局迄ご一報ください。

◎役員会の開催のお知らせ

平成11年度の役員会を左記のとおり開催されます。

日時 平成12年2月5日(土)
午後2時30分より

場所 京都タワーホテル会議室

詳細は追ってご案内いたします。

◎年会費の納付のお願い

平成11年度もあと僅かです。本年度の年会費未納の方は、お手数ですが同封振込み用紙にてお願いいたします。

編集後記

新年お目出とうございます。年初にさいし会員皆様方のご多幸とご健康をお祈り申し上げます。

低成長時代に入って久しく、業界再編・リストラ旋風の中でいかにして21世紀につなげるかが、各業界の今年の主要テーマだと思えます。辰年にちなみ景気がスパイラル・アップすることのみ願っております。本年もよろしく

松本 博 記

お詫びと訂正

平成12・13年度版新名簿に一部誤りがありました。お詫びして訂正いたします。(名簿505頁)

協賛会員 オルガノ(株)の住所 (誤) 〒113-0033
東京都文京区本郷5-5-16 (正) 〒136-8631
東京都江東区新砂1-2-8

訃報

昭4	岡 次雄	10	7	8
昭4	伊達 達	11	6	13
昭6	西原 勇	11	2	
昭7	古田利雄	10	12	18
昭10	染田武男	10	8	31
昭12	木村広美	11	11	29
昭13	片岡高示	11	9	3
昭13	近藤喜久治	11	11	20
昭13	松本義允	11	7	14
昭14	長坂孝一	11	11	29
昭15	中川修一郎	11	10	4
昭24	江口 潤	11	10	15
昭31	山口 保	11	11	15
昭31	山崎義夫	3	2	

以上の方々のご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。